第一話 喫茶去

「髪留リツと申します」

リツが深くお辞儀をする。ご住職は額に手をあてた。

「髪留さん？ かみどめ……ひよっとして、はなさんのお孫さんか」

その顔が、ばあ、っと明るくなる。

「はなさんは父の代からよく来てくれてたな。坐禅もすれば袈裟もつくるお方だった。いや、懐かしい」

おばあちゃん、お母さんが大学生の時、急に亡くなった。

おばあちゃん、お母さん、リツの三人で暮らしてきたからとても悲しかった。

「それで、今日はどうしてこちらへ」

「その……会社を辞めまして」

「お若いのにご病気にでもなられたか」

「そういうわけではないのですが、仕事をしようとする具合が悪くなるようになって……」

困ったら観音庵に行くといい、と祖母が……」

そう言っ、言葉に詰まった。

ある日、いつものようにデスクへついた途端、呼吸が苦しくなって倒れてしまった。

病院に行ったりもしたが、ついには通勤電車に乗ることもできなくなってしまったのだ。

リツは二十八歳。

これからの生き方を考えなければいけない時期だから困っている。

「そうか、はなさんがそんなことを……まずは座りなされ。茶でも飲もう。『喫茶去』なんて言うしなあ」

「キッサク？」

聞き慣れぬ言葉が出たので鞆からノートを取り出すと、ご住職は怪訝である。

「ん？……メモとるのか」

「いけませんか」

「いや、とつてもとらんでもいいけれど」

学生の時から何でも書きつけて忘れないようにしてきたからこそ、成績も悪くなかったのだ。

ノートを開きペンを握ると、ご住職はお茶の準備をするために立ち上がってしまった。

「膝が痛い」と歩みも遅いし、茶葉が見当たらないらしく、えらく時間がかかっている。

「キッサク」はどこへ行つたのだろう。

リツはイライラとし始めた。

元々、無駄が嫌いなたちである。

ようやく茶葉を見つけたようで席につくと、ご住職はお茶を入れてくれた。

飲んでみるとまずくもないが、おいしくもなかった。

「正しすぎると良くないなあ」

ご住職のつぶやきに、リツは、ぼかん、とした。

「正しすぎる？」

「ああ、あかんあかん。正しすぎると間違う間違う」

「正しすぎる、というのがあるのか」

「ちょうどいい塩梅、というのがある。この茶もな、いくらでもうまくできるけど、あんまりうますぎてもなあ」

「味が良すぎるとよくないのですか」

「おいしいほうがいいに決まってるけどな、すぎると戦争が起こる」

「戦争？」

「たとえじゃなく、歴史みりゃ茶が広まったからこそ起きた戦争もある。すぎると争いの元になる。

なんでもな……ああ、もうこんな時間か。悪いが次の用事があるんでな、また好きな時に来なさい」

ご住職は慌てて立ち上がり、部屋を出ていってしまった。

リツはあ然とした。

しばらくして気がつけば、メモを取っていなかった。